

問題一 (200文字以内) 25点

諸学問の中には、「人間」をバイアスの源と捉える傾向と、「人間」を価値の源泉と捉える傾向とが併存していること。国家による経済発展への貢献を見込んだ投資が学問間の溝を深め、分野ごとの断絶が起こりやすい構造が温存されたこと。欧米でも理工系と一部の社会科学が政策的観点から重視されたため、溝が生まれたこと。さらに、この区分が文化の中に深く根付き、時には差別にも利用されてきたこと。(186文字)

問題二 (80文字以内) 20点

一般に、異なる視点を持つ者同士で話し合うと、居心地が悪いけれど、均質な人びと同士の対話よりも、正確な推論や、斬新なアイデアを生む確率が高まると言われること。(78文字)

問題三 (400文字以内) 55点

【その1】(学問と同じくそれに携わる人も多様性を認識することが大事)

文系と理系というカテゴリー分けは便利ではあるけれど、それは便宜上のものでしかないということである。筆者が指摘するように、諸学への統一は果たされることはないが、新たな「学際」系分野が発展したことによって、社会を変える可能性を秘めているし、その方向性やタイミングは誰にも予想できない。

現実には就きたい仕事のために必要な知識は、このカテゴリー分けのようにはいかないことのほうが多いだろう。したがって、学び直しができるような仕組みづくりこそが、まずは必要なことではないかと思う。それは、失敗したからやり直すだけでなく、これまで身につけた知識や知見から改めて学習することで新たな知的好奇心を発掘し、自己の成長をもたらすことにつながるのではないか。そして、自己の成長の実感が「学際」系分野への広がり、「違いが活かしてこそ、補い合えることができる。」ための一歩踏み出す勇気を与えてくれるのではなかろうか。(397文字)

【その2】(「学際」系分野の発展により、新たな社会問題への対応が可能となること)

文系と理系というカテゴリー分けは便利ではあるけれど、それは便宜上のものでしかないということである。筆者が指摘するように、諸学への統一は果たされることはないが、新たな「学際」系分野が発展したことによって、社会を変える可能性を秘めているし、その方向性やタイミングは誰にも予想できない。

今日の高度に成熟した社会においては、従来の学問領域にとらわれていては様々な問題を解決することは困難だと思われる。だからこそ、新たな「学際」系分野の登場によって技術革新が進むと、私たちの生活はより豊かで便利になるだろう。

そしてそのためには、私たち一人ひとりが固定観念を持たずにすべての学問領域に対して、真摯に向き合うことを心がけるべきではないか。たとえ役に立たないと思われることであっても、次の技術革新や新たな「学際」系分野の登場につながることを期待できる社会が必要とされているのではないだろうか。(388文字)